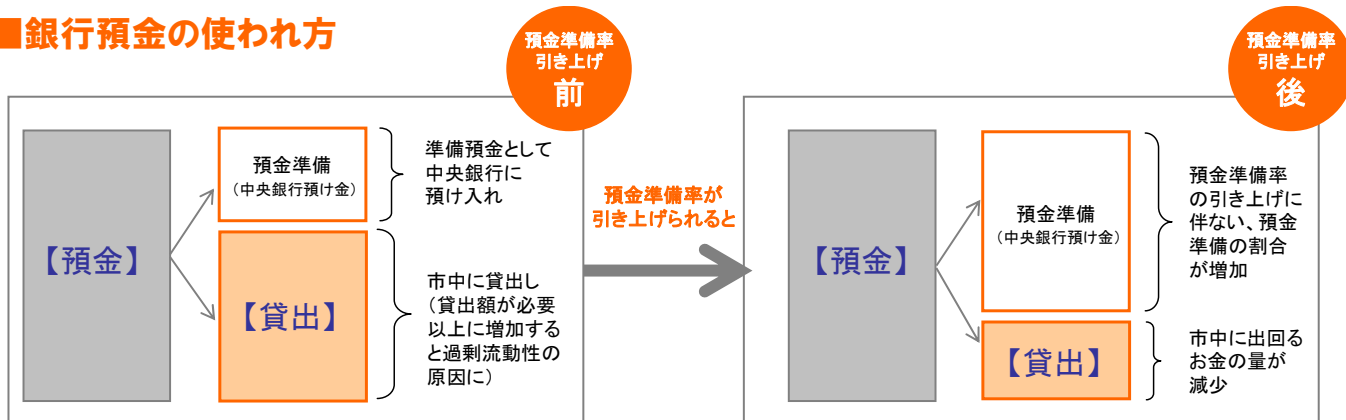


預金準備率引き上げは懸念材料？

最近、中国をはじめとする新興国の一部で預金準備率が相次いで引き上げられていますが、同準備率の引き上げにはどのような意味があるのでしょうか？

預金準備率とは、一般に、民間の銀行が預金残高のうち、中央銀行に預け入れることを義務付けられた金額の、預金残高に対する比率のことで、それ以外の残りの部分が貸出として市中に供給されます。中央銀行は、預金準備率の変更を行なうことで、民間銀行の貸出量の調整を行なっています。上述のような新興国では、資産バブルやインフレが懸念されはじめているため、預金準備率の引き上げによって、市中に出回っている過剰な資金を抑え、巡航速度の成長を持続させる狙いがあるとみられます。

銀行預金の使われ方



中央銀行が預金準備率の操作を行なうことで、市中に出回るお金の量を調整することができます。預金準備率を引き上げると、銀行の融資姿勢が厳しくなることから、過剰流動性(金余り)の抑制などにつながると考えられます。

※上記はイメージ図です

なお、中央銀行が行なう主な金融政策には、預金準備率操作のほかに、政策金利の変更といった貸出政策があります。多くの新興国が、金融危機対応として政策金利を歴史的に見て低い水準に引き下げていることを考えると、景気回復が進捗する一方で、インフレ圧力が高まるようであれば、やがて政策金利の引き上げが行なわれるとみられます。

ただし、政策金利の引き上げは、もともと相対的に高い新興国の金利水準をさらに上昇させることとなり、海外からの資金流入を加速させてしまう可能性があります。これによって、当該新興国の通貨高が生じれば、輸出の障害となり、経済の成長を妨げる可能性も考えられます。また、政策金利の引き上げは、銀行の貸出全般に影響をおよぼしやすいことから、預金準備率の引き上げよりも慎重に実施されることが考えられます。